

◆子どもの姿からの肯定的な見取り

〇入園当初は家の人から離れる時に泣いたり、ミルクや食事を食べさせてもらうのを嫌がったりして慣れない環境に敏感に反応していた。「ここはどこ?」「知らない人、だあれ?」「見たことのないもの…かわいい」の気持ちでいたのでは?

→穏やかな声で話しかけ、温かな触れ合いを大切にしながら子どもの生理的欲求を常に満たしていくことで、「保育室=安心して楽しく過ごせる場所」「保育者=穏やかな気持ちにさせてくれる人、好きな人」と認識してくれるようになった。また笑顔や喃語も出てくるようになった。

〇新しい環境に居ることだけで精一杯。朝早い登園や泣いて過ごすことに疲れるので午前中睡眠をとる子が多かったが、徐々に生活リズムに慣れ身体も発達してハイハイやつかまり立ち、歩行など自ら動こうとする姿も見られるようになる。

→色々な物を見て興味をもって触れにいき、友だちや保育者にかかわりにいく姿もでてきた。

これは何かな? 中に入れた♪

きれい

鏡の向こうに誰かいる!

ベッドみたい♪

お家みたいで気持ちいいな

私もやりたいな

ばあっ!

ぶにぶにしておもしろい

引っ張ったら音がするんだね!

先生と一緒に行けそう

フープー! 道路みたいだな走らせてみよう♪

ぼくも一緒に遊ぼう♪

・友だちが入っている姿を見て興味をもち、一緒に入りに行く。場所を独占したいという気持ちも生まれ、取り合いになることもある。その場面では保育者が周りにいる子ども全体に絵本を読み聞かせをしたり「ねんね～」と言いながらブランケットを渡したりして、遊びを共有したりかわりをもって遊べるようにする。
・「子どもが抱いているイメージ=家の部屋の雰囲気」を大切に、空間に入って遊びを楽しめるようにした。

・既存の玩具と行事用につくった環境を合わせて使って遊ぶ姿が見られるようになってきた。「おもしろいね」と共感し一緒に遊びながら存分に楽しめるように見守る。
・子どもが偶然見つけた遊びや発想を見逃がさず、ともに喜んだり「すごいね」と声をかけたりして繰り返して遊ぶ楽しさも伝えていくようにした。
・自分で遊びを見つけて触れに行くことができるような環境の配置をした。

・自分で動けるようになった子どもが触ってみよう、やってみようと興味をもてるような玩具や環境を準備し整えた。
・保育者も一緒に行ったり誘いかけて遊んだりする中で楽しさを共有し、「もっと遊びたい」と思えるようにしている。

わかったこと
「保育者が子どもの安心できる環境をつくることで、子どもが自らやってみようとする気持ちが育った。」

「みんなどこにいこう！」

◆子どもの姿からの肯定的な見取り
 ○進級し、新しい保育室の環境や保育者に慣れるまで、落ち着かない姿が見られた。
 ・好きな遊びが見つからない。 ・新しい担任や友だちとの関係ができていない。
 ・保育室から飛び出して廊下でなにをしようか戸惑っている。
 →保育室の環境を見直し、興味のある遊びのコーナーを考えることで、安心して遊べる場となった。
 ○園庭に出ると広くて落ち着かず、非常階段下の狭いスペースにいると落ち着いた。
 ・広い園庭で何をしたら良いのか分からない。 ・異年齢のたくさん子どもたちに不安を感じる。
 →保育室でしている遊びの延長を外でも再現する。狭い所にあったベンチを広い場所に持ってくることで伸び伸びと遊べる。

「くるまたのしいなあ」
 「さかみちおもしろいなあ」



・保育室での遊びが満足できるよう、子どもたちの興味のあることを用意することで、保育室での遊びに夢中になった。
 ・好きな遊びがあることで保育室でも安心して遊べるようになった。

「ガソリン満タンにしよう」
 「ここにガソリンスタンドがあるよ」



「どこいく？」
 「ナビでピピッ」



「これなに？」
 「ならべたら、みちみたい」

・車で出かける機会が多いので、保護者のしていることを模倣できるような遊びを用意する。
 ・保育者も一緒になって「どこいく？」と助手席に座るなど、遊びを楽しむようにする。



「くるまみたいになったなあ」
 「もっとタイヤないかな」



「ハンドルみつけたー！」

・ベンチを平行に並べたことで座れる子どもの人数が増えた。
 ・「タイヤがあったらいいなあ」と保育者の投げかけた言葉に本物のタイヤがある場所を子どもが知らせ、遊びに使うことができた。
 ・「ハンドルないやん」という子どもの声に、「探しに行こう！」と倉庫へ誘いかけ、それぞれが見立てたものを選ぶことができるようにした。

わかったこと
 「保育者が一緒にやりたい好きな遊びを叶えようとする中で、子どもの友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わう気持ちも育った。」